

SUMI

Eitenji

2025~

ART PORTFOLIO

DRAWING WORKS

FOUNDATIONS OF VISUAL
EXPRESSION

BODY ART

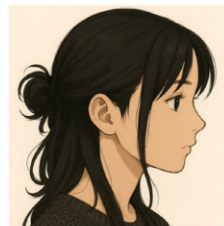
WHERE DISTANCE BETWEEN
ART AND HUMAN DISAPPEARS

BEYOND FORM

EXPLORING EXPRESSION
WITHOUT BORDERS

**ART PORTFOLIO
SELECTED WORKS**

何かが棲みついている。



Sumi

浜松市在住の細密画家
ボディアートアーティスト

An Intuitive Pattern Artist and Body
Artist based in Hamamatsu
City, Japan.

13歳頃、細密な集合体を直感的に描く表現に自然と向かうようになり、それ以降現在に至るまで一貫して同じ画法で制作を続けています。

これまで作品を外部に向けて発表する活動（SNS、イベント等）は行っておらず、2025年5月より、初めて作品を公開する段階に入りました。

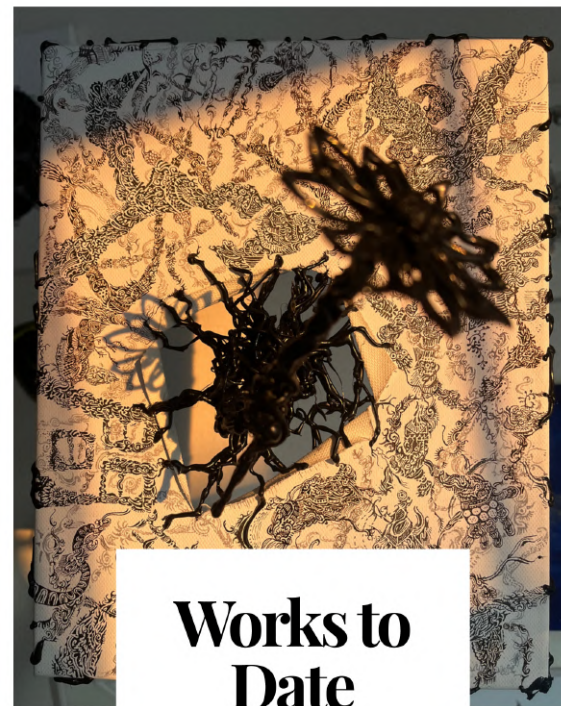
・2025年静岡アートグループ“アトリエ茶葉”に参加

・2025年11月浜松市主催、アートイベント（BLACK flagproject）に参加。ボディアートのライブイベントを2日間披露



@SUMI.E.ART

✉: sumi.eitenji@outlook.jp



Works to Date

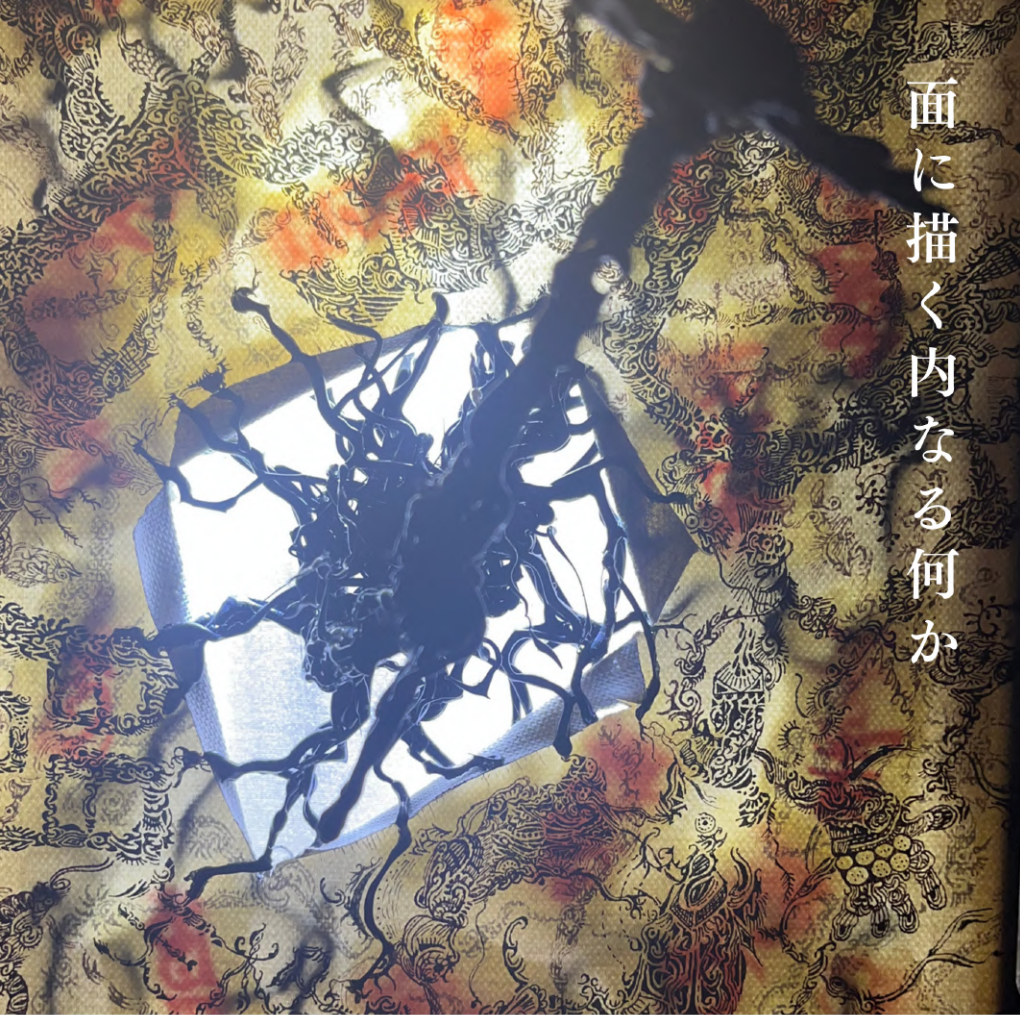
暴力や罵声、孤独と恐怖、そして愛情が混在する環境で育った私にとって、絵を描くことだけが、他者に踏み込まれることのない、私自身の世界でした。

優劣も正解も存在せず、誰にも再現できないその世界は、今日まで変わらず、私に寄り添い、支え続けてくれています。

私にとって絵とは、究極の現実逃避であり、同時に、完全な自由そのものです。

これまで私の絵は、誰かに見せるためでも、評価を得るためでもなく、ただ自分自身が納得するただけに描いてきました。

自分のためだけの絵を、これからは人に向けて発信していきたいと思い本格的に活動を始めています。



面に描く内なる何か

描画作品には、右ページに
物語を添えています。

その物語の中で私が感じたものが、
人や物事に棲みついている“何か”に
最も近い感覚であると言えるからです。

一体何を描いて いるのか

私の絵は、何を描いているのか
と問われる事が多く、そのたび
に私は言葉に詰まります。

人の中にも物事の中にも、何か
が棲みついている。

それが美しさなのか、醜さなの
か分からない言葉にし難いもの
を、私は確かに感じ取ってい
て、考える前に先に手が動きた
りするような、とても直感的で感
覚的なものを描いています。

ビタリと当てはまるワードが無
いため、タイトルは大抵後付け
でより近い言葉を当てはめて
います。
それでも無題にしないのは、近
いものを感じてほしいと願うか
らです。

そしてそれをキャンバスや画用
紙などの面に描く理由は、人間
が定めた、描画という表現の枠
だと感じるからです。

定められた枠の中に描くこと
は、まるで人間の人生そのもの
のような気がしています。
定められている枠に描くからこ
そ強く表現できるものがあるこ
ろと思っています。

一表現者として、さまざまな表
現に向き合っています。が、
面に描くという私の原点は、こ
の先もやめることはありません。



「タイカ」 2025年 キャンパス24×30

「――そばにいてやろうか？」

自室で膝を抱え、丸くなりながら泣いているフルルに向かって“それ”は言った。

フルルは泣き腫らした顔をあげると、それを見つめた。

“それ”の正体は、フルルが先日クラスのみんなと同じものを描こうとして失敗した、真っ黒な絵から生み出された謎の物体だった。

物体はフルルに向かって再度同じ言葉を尋ねた。

「――そばにいてやろうか？」

「……ずっと？」

「お前が望み続けるかぎりな」

フルルは一度鼻を吸ってから、ゆっくりと頷いた。

「――ただし、お前は大きな対価を払うことになる」

「それは、どんな対価なの？」

物体は少しの間を空けてフルルに言った。

「……人として一歩も二歩も下がることになるぞ。誤解され、敬遠され、ひとりぼっちが嫌で泣いているのに余計に人は遠ざかる。お前は俺と絵を描くこと以外、何をやっても満たされることはないだろう」

それでもいいならと、物体はフルルに言った。

フルルは迷わなかった。
迷わず頷いたのだ。

どうせ最初から、人と同じ場所に立てていないのだから、一歩や二歩下がったところで何も変わりやしない。

どうせ最初から、誰もそばにいないのだから、敬遠されたところで何も変わりやしない。

どうせ満たされる状態が何なのかも分かっていないのだから、むしろ一つだけ満たされるならいいほうじゃないかと。

物体はゆっくりとフルルに花を差し出し、フルルはそれを手に取った。



「花灯（はなともし）」 / Lantern of Petals キャンパス 24×35

エリスは暗闇をひたすら歩いていた。どうして歩いているのか、この道は合っているのか、終わりはやってくるのかすら分からなかった。やがて歩き疲れ、歩く事を諦めようとした時だった。暗闇の中、しゃがれた声だけが響き渡ったのだ。

「エリス、お前にいい事を教えてやろう」

エリスはその声の持ち主が誰であっても構わなかった。女だろうと男だろうと、神だろうと悪魔だろうとこの状況から抜け出せるのなら何でもよかったのだ。

「ーどうか教えてください」

「いいだろう。それはとても険しい道だが、楽な道のりだ」

エリスはこの声の言う事がちっとも分からなかった。けれどもそれでも構わなかった。この状況から抜け出せるのなら何でもよかったのだ。

そんなエリスの気持ちを察したかのように、声は3つのことを教えてくれた。

「決して人を信じなければ、1本目の花が次の道を示してくれるだろう」

「決して人を愛さなければ、2本目の花が最後の道を示してくれるだろう」

「決して自分を許さなければ、3本目の花がお前の道を楽しなものに変えてくれるだろう」

エリスは感謝し、その言葉通りに進んでいった。エリスはその先に何が待ち受けていても構わなかった。花があろうと無かろうと、この状況から抜け出せるのなら何でもよかったのだから。



「醜根」 / The Ugly Root キャンバス24×30

ニコはその男が大嫌いだった。

偽善者のような発言も、取り繕った笑みも、時折見せる疲れた顔も、とにかく大嫌いだった。

ニコは分らせてやりたかった。
あなたは人から優しいと言われたいだけなんだろうと。

とある日、ニコはその男にこう言った。

「私には人の本質が見えるという特別な能力があるの」

男は笑みを浮かべる

「そうなんだ。じゃあ、僕の本質は何か教えてくれるかい」

ニコは得意げになって言った。

「あなたの本質は、“人から優しい人と言われたい”という偽善的なものよ」

男は何度も頷くと、ニコに言った。

「実は僕にも特別な能力があるんだ」

ニコは目を丸くして『どんなもの?』と尋ねた。
そんな風に返答されるとは思っていなかったから、思わず聞いてしまったのだ。

すると男は疲れた顔で言った。

「僕には、人の根っこが見えるんだ。それは魂から生え出して、複雑に絡みついている」

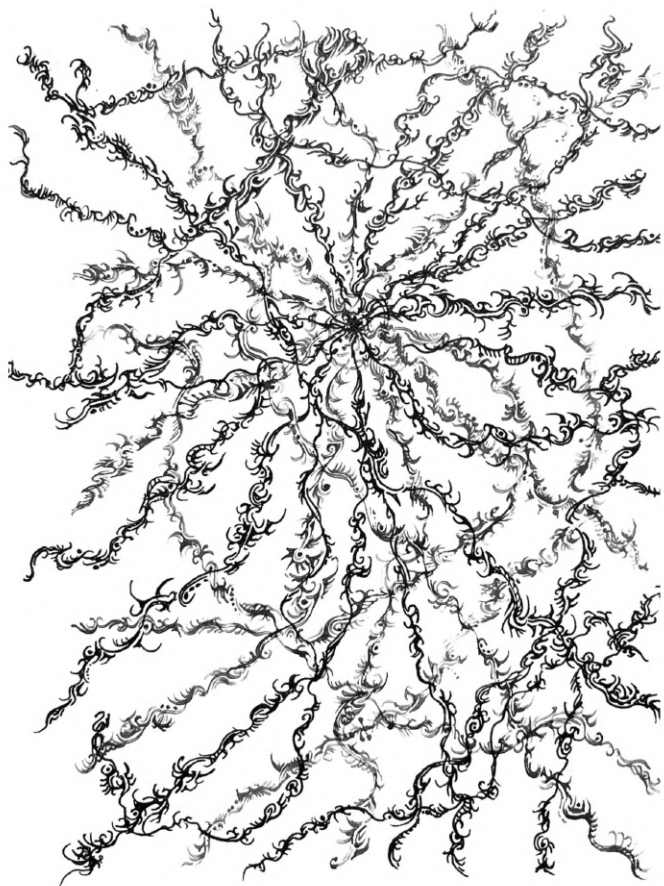
「何それ、変なの。…なら、私の根っこはどう見えるの?」

男はニコの言葉に、声を出して笑った。

ニコはそれを見て、彼がそんな風に笑ったところを初めて見たと驚いた。

「ニコ、君の根っこも僕の根っこも、他の誰の根っこも大きな違いはない。絡みつきかたが違うだけさ。――さあ、君の言う本質と、僕に見える根っこは、何が違うのだろうかね」

それっきり、彼は何も言わなかった。



「起点」 / the root 画用紙14×18

一人の女が、始まりの地に立っている。

終わりの地からやってきた女だった。
女は草原が広がる大地を眺めながら呟いた。

「何かの始まりは終わりの始まり。では、終わりの終わりはどこかしら」

今まさに始まりの地から歩き出そうとしていたフィリボは女に言った。

「終わりは終わりなのだから、その先はありませんよ」

そう言ってフィリボは足を一本踏み出した。

女は、歩き去っていく彼の背中に向かって呟いた。

「ーでは私はどこから来たというの？」



「スケープゴート」 / scapegoat 2012～2025年 キャンパス 24×24

マタイは新しい村に引っ越してきたばかりだった。
この村では年に一度、山羊に人間の罪を背負わせて、荒野に放つという行事があるらしい。

荒野に放たれた今年の山羊の背中をみつめながら、マタイは村長に尋ねた。

「あれは人間ですか？」

村長は、何を言っているんだと怪訝な顔をした

「山羊に決まっておろうが」

マタイはさらに尋ねた。

「人間ではないのに、人間の罪を山羊は背負えるでしょうか」

「……なるほど、一理ある。では、来年から選ばれた人間を一人、荒野に放てばよいか？」

村長の恐ろしい提案に、マタイは言った。

「その人間は他の人間にはなり得ないのに、他の人の分まで罪を背負えるでしょうか」

「……なるほど、ではどうすればいいというのだ？」

マタイは少し考えたのち、こう答えた。

「では、罪を持ったものを荒野に放つと言うのはどうでしょう。自分の罪を他の誰かに背負わせること自体が、罪なのですから」

すると村長は荒野を見つめながら呟いた。

「来年はこの村から一人も人間がいなくなるに違いない」



「稲光」 / lightning キャンバス24×35

大きな山の麓に、ヌシという男が住んでいた。

その男、必ず雷が鳴り始めると、外に出て天を見上げるらしい。

それも、大きな杉の木の下から見上げるだけののだから、酔狂にも程がある。

村人達はあの男は変わり者だといつも皆で笑い合った。けれども、死なれるのは困る。あの男はああ見えて、村一番の力持ちだったからだ。

雷鳴が鳴り響いた夜更けのこと、雨に打たれ天を見上げていたヌシに村人達は叫んだ。

「ヌシや！そんな所におったら、雷に打たれて死んじまう。もう戻ってこい！」

けれどもヌシは天を見上げたまま動こうとしなかった。

見かねた村人の一人が大声で尋ねた。

「何をそんなに、天ばかり見上げとるんじゃ」

ヌシはようやく首を下げ村人達を見ながら言った。

「――稲光を見とる」

村人達は呆れたように尋ねた。

「稲光の何を見とるというんじゃ」

すると、ヌシは嬉しそうに笑って言った。

「あの美しい稲光は、この身に浴びても美しいんじやろうか。それを確かめたいんじや」

その言葉に、村人達は大層驚いた。

そしてヌシという男は、やはり変わり者だと思った。けれども村人達は、稲光が彼に落ちた瞬間をどこか見てみたいとも思ったのだった。



「hatsuro」 / budding talent キャンバス16×23

編み物上手の祖母が、孫であるノアに優しく語りかけた。

「何かでいい。どんなものでもいい。得意なものを見つけ、それを伸ばし大成させなさい」

それからノアはあらゆることに挑戦した。ピアノの音が好きだからピアノを習い、実験が好きだから科学を学び、泳ぐのが好きだから水泳を習った。

けれど、それらはそこそこ上手くなるだけで、大成はしなかった。

編み物で名人になり、編み物でお金を稼ぎ、編み物で有名になった祖母のようにになりたいのにとノアは嘆いた。

やがて祖母が亡くなると、最後の別れを言いに来た祖母の妹が遠方から訪れ、ノアの前に現れた。

祖母の遺体の手に触れると、勲章のように飾られていた祖母の編み物を見て泣きながら言った。

「嫌いなことをやり続けるなんて、お姉ちゃんは馬鹿ね」



「陰と陽の差など、僅（わず）かだ」 / "The Line Between Yin and Yang Is Faint." キャンバス 25×25

アレスは自分の顔を鏡で見て驚いた。
そしてそれを手がけてくれた女に向かって、鏡越しに言ったのだ。

「一話が違うではありませんか。私は誰からも受け入れられる顔にしてくれと言った筈です。それを聞いてあなたは『では誰からも愛される顔にしましょう』と言いましたよね？」

女は笑顔で頷くと、アレスの顔を背後から両手で優しく挟みながら言った。

「ご要望通りの顔ができましたよ」

けれどアレスには、その顔が左右で異なって見えるのだ。
右半分は温かい顔立ち、左半分は冷たい顔立ち。

アレスが絶望した顔で鏡を見つめる中、女はさらに言った。

「あら、分かりませんか。これが人に愛される顔ですよ」



「吉兆」 / "auspicious sign" パネル 25.5×20

タカミとムスビはその日、天を見上げて言った。

「これは良い事が起こる前兆に違いない」

「――そうだろうとも。今日は縁起の良いことばかりだ。大地には亀と鶴が笑い合い、鯉が飛び跳ね、白い蛇が舌を出している。そして空には龍が飛んでいるのだから、何と良い兆候か」

タカミの言葉に、ムスビは天に指を掲げた。

「見ろ、太陽が黒くなりはじめている」

「何だって。黒い太陽は吉兆ではない。悪い事が起こる兆しだ」

2人は顔を合わせた。

やがてタカミはムスビに尋ねた。

「亀も鶴も居て、鯉も白い蛇もいる。龍も飛んでいるのに、黒い太陽が出た場合は、一体どんな兆候だ？」

暫く2人は考え込み、言った。

「――吉兆だな。縁起の数のほうが多い」

「……そうだな、そうしよう。何なら、あれも吉兆にしまえば良い。滅多に見ることができない貴重な現象に違いないのだから」



「身中の虫」/enemy within 画用紙10×15

芋虫ダンテの一生は、とある植物と常に共にあった。

なぜなら、ダンテは蝶になるまでの間、植物に寄生しなければ生きていけない生き物だからだ。

ダンテにとって彼は寝床を与えてくれるとてもありがたい存在だった。そして彼にとっても、ダンテは痒みの原因である小さな虫を食べてくれるありがたい存在だったとダンテは思っていた。

「――もうそろそろ蛹になる頃だね、ダンテ」

彼の言葉にダンテは頷いた。

「蛹になって蝶になったら、僕はどこまでも飛んでいくつもりだよ」

ダンテは風の噂で聞いた蝶の楽園に行くのを夢見ていた。

「そうか、それは楽しみだね。――蛹の間はしっかりと守ってあげるから安心して眠りなさい」

「ありがとう」

やがてダンテは長い時間をかけて蛹になると、深い眠りについた。

――ダンテは夢を見ていた。

蝶の楽園に辿り着く夢を。そこは色とりどりの花に囲まれていて、甘い香りがする楽園に違いなかった。

――――

「おや、ダンテはもう飛び立ったのかい」

近くに暮らすてんとう虫が、ダンテと共に暮らしていた植物に尋ねた。

すると、植物は風と共に揺れながら応えた。

「――私は虫食い草なんだ」



「虹耀樹伝（こうようじゅでん）」/Myth of the Prismatic Tree キャンバス 27×22

この世界の中央には、1本の大きな大樹が世界を見下ろすように君臨していた。

この世界の小さな街に暮らす一人の少年エデンは、人々が良い行いをすれば、大樹は美しく光り輝くことを学校で習ったばかりだった。

天からの怒りを受け、豪雨を抑え、澄み切った空気を人々に送り続ける大樹の光輝く姿が見てみたいと、人々は日頃から良い行いを繰り返していた。

やがて大人になったエデンは、何をしてもこの大樹が光り輝く事は無いのだと悟った。その姿を見た者すらいないのだから、きっと作り話なのだと。

「やめろよ、エデン！そんな事したら、天罰がくだるぞ！」

友人の一人が、エデンの手に握られている斧を見て叫んだ。

「少しだけだよ。ここいら一体の木の根を切れば、人々が暮らしやすくなるんだ。何万本とある内の何本かを切ったって、大樹は枯れないよ」

人口は増え続け、暮らす土地がもう無いからというのが、エデンの言い分だった。

「だからってそんな事したら、大樹は二度と光らないかもしれない。お前一人の行いで、俺達の願いを台無しにするつもりなのか？」

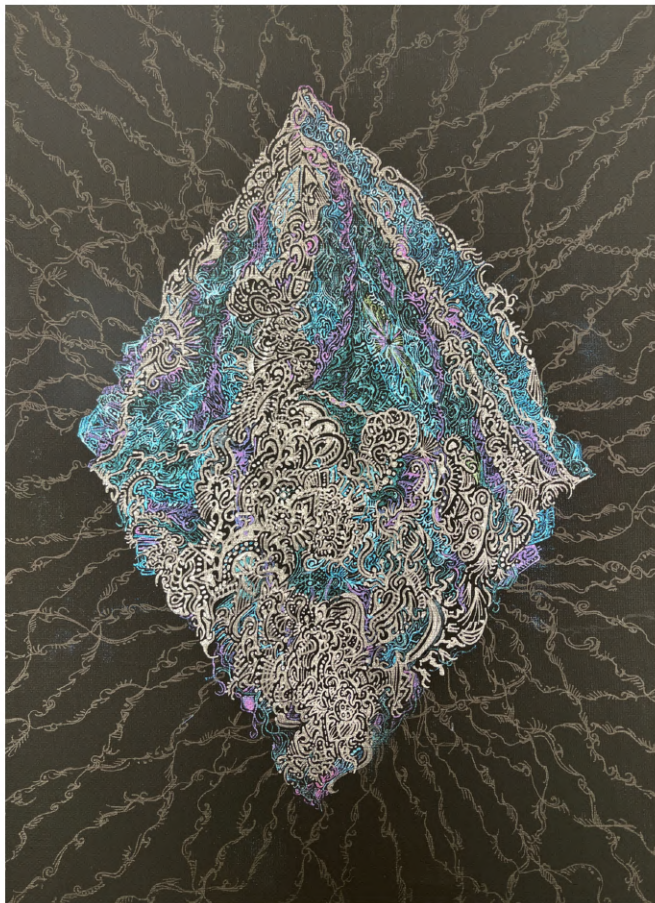
エデンは友人の言葉を聞き、立ち止まった。

「だからこうして、真夜中にやろうとしてるんだろう？翌朝住む土地ができていたら、人々は大樹様が土地を譲ってくださったと喜ぶからさ」

友人が頭を抱える中、エデンはついに斧で大樹の根を切ってしまった。

広い土地の真ん中で全ての作業を終えて満足気に座り込んだエデンと、嘆き悲しんで座り込む友人。

彼等の目の前に変わらずに聳え立つ大樹は、やがて2人を包み込むように、七色に光り輝き始めたのだった。



「良心のカケラ」 / "a shred of conscience"キャンパス 24×34

『お前は良心のかけらもない』と親父は俺に言った。

だが俺だって良心の“カケラ”ぐらいはある。

まず、女子供には手をあげたことがない。
それは立派な良心の一部だろう？

それから動物にも優しいぞ。
猫は嫌いだが犬は大好きだ。

そしてここ数年は真面目に働いてちゃんと稼いでいた。
それなのになぜ親父は、俺の中の良心を認めちゃくれねえんだ。

そう語った男パーシヴァルに、銃を突きつけられた銀行員の青年は両手を上げながら言った。

「――カケラではダメだからですよ」

何だって？とパーシヴァルは銃口を強く彼の額に押し付けた。

男は僅かに怯えたが、はっきりとした口調で言った。

「あなた以外のここにいる人間は、カケラではなく良心がある」

「……」

「良心のカケラとは、最悪な場面で、最悪な人間に求める最後の希望のようなものであって、本来であればカケラしかない時点で無いようなものです」

パーシヴァルはカチリと銃の安全装置を指で外すと、青年に尋ねた。

「まさに今がその場面ってことだな？――なら坊主。俺はこのあと、引き金を引くと思うか？」

銀行員の青年は返りを見渡した。
ぐずぐずと泣く同僚の女、小さな子供を大きなお腹で守ろうとする女、そして見るからに足腰の悪そうな年老いた男。

やがて青年はパーシヴァルを再び見上げ、こう言った。

「――あなたは良心の“かけら”もない」



「Perpetual Additions」キャンバス 90×65

「一嘘つき」

トヨは6年も付き合った男にそう言って別れを告げた。
永遠に愛してくれると言ったのに、彼は約束を守らなかった。

涙を堪え、車窓から田園風景をジッと眺めていた。

トヨの友人達は、すでに結婚し子供もいる。
彼女らが言うには、永遠の愛など無いという。
しかも愛は途中で形を変えてしまうというのだ。

つまり愛とは、人間が繁殖する為の手段に過ぎないという事なのだろう
か。

だとすれば、6年も変わらずに1人の男を愛し、その愛を失った私は
欠損している事になる。
なら初めから、繁殖するだけの思考しか持たなければよかったのに。

たった一人を愛し、たった一人に愛される。

何故そんな難しい感情を持たなければならないのだろうか。

一際電車が揺れ、ゆっくりと止まった。

やがてトヨの目の前に誰かが座り、またゆっくりと電車が動き始め
た。

「……あの、大丈夫ですか？」

トヨは突然話しかけられた事に驚き、車窓から目の前の相手に顔を向
けた。

泣いていたトヨに驚いた男が、心配そうに此方を見ていた。

自分好みの優しい顔。年齢も同じ年ぐらいだろうか。結婚指輪はし
ていないが、それはまだ分からない。

トヨは涙を拭くと、人当たりの良さそうな顔で笑った。

「ありがとうございます、大丈夫です。ごめんなさい、変なところを
お見せしてしまって」

そう言って、トヨは夕陽で輝く綺麗な田園を再び眺めた。

愛は永遠に続くと思いながら。



「不易（ふえき）」 / Immutable キャンバス17×17

「皆さん、よく見てください。この中には、目には見えない微生物が数え切れないほど存在しています」

大きくもなく、小さくもない凹凸のある黒い物体を見つめ、その生物は尋ねた。

「この中にある丸いものは何ですか？」

「よく気がつきましたね。この球体はいくつかあって、熱を放ったり冷たかったりと、それぞれに特徴があるんです」

「一なるほど。では、微生物はどこにいますか？姿が見えませんが……」

「微生物はあの青くて回転している球体で活動しているようです」

それを聞いて、微生物とは本当に未知な生き物だとその生物は思った。

聞くとところによると、この微生物達は時折何かに乗って、黒い物体を移動しているというのだ。さらに驚く事に、彼等は自分達が瞬きをする僅かの間に、少しずつ進化しているらしい。

これまでに研究して分かったことは、ついこの間までこの微生物は青い球体から出てくることすら出来なかったという事実だった。

「一皆さん、よく見てください。この中には、微生物を研究する生物が存在しています」

大きくもなく、小さくもない凹凸した黒い物体を観察しながら、何やらせつせと動き回っている生物を中生物はジッと見ながら言った。

「微生物も、それを観察するこの生物も、まさか自分達が見られてるなんて思ってもいないだろうな」

そう言って中生物は少し大きいつるつとした黄色い物体を見つめた。

そして突然、中生物は何かに気付いたかのように上を見上げたのだ。

「ん？ひょっとすると……」

けれど見上げた先は、どこまでも続く白い空間しかなかった。



「want to bee」キャンバス 16×23

「ーこりやすごい。この花の蜜はどの花よりも甘くて美味いぞ」

働き蜂のロキは、引越し先の道中で見つけた甘く香る花の蜜を夢中で吸い取った。

すると、自分の蜜を吸われている花がロキに話しかけてきたのだ。

「ちょっと、勝手に蜜を吸わないでくれる？」

ロキは驚き、頭を上げると、声を張った。

「吸わないでって、花の蜜は吸われるためにあるんだろ？それにほらー」

ロキは自分の手足を持ち上げて左右に動かし、花に見せながら言った。

「あんたの花粉もしっかりと手足についてる。あとはおいらが飛びながら運ぶだけなんだから、吸わせてくれよ」

すると、その話を聞いた花が尋ねた。

「そんなこと一体誰が言ったの？ー私の蜜を吸うかわりに、花粉を届けるだなんて」

え？とロキは首を傾げた。

「誰って言われても……。おいらは子供の頃におっ母から聞いたんだ。昔の昔そのまた大昔に、何でも知りたがる生き物が居て、その事を発見したってさ」

それを聞いた花は、花びらを揺らし笑った。

「あら、的外れな発見ね。何でも知りたがる生き物って、花でも蜂でも無いんでしょう？なぜそんな事を解明しようとしたのかしらね」

馬鹿みたいだと言わんばかりに、花は花びらをもう一度揺らした。ロキは大きな目をぐるぐると動かし、花の話を考えていた。

「ーならこの花粉は何なんだい？」

ロキの質問に花びらは言った。

「あら嫌だ。あなたも、自分以外のことを知りたがる生き物なのね」

何かが棲みついている。



ボディアートの魅力



身体に寄生する

私には、身体に絵を描くボディアートという表現活動があります。高価なキャンパスの代わりに、自宅にあった安価なマジックペンで、自分の腕に絵を描いたことが始まりでした。描いた作品の原画は手元に何も残りませんが、身体との融合によってより人間らしい姿になった絵を見て、私はすぐにその場になりました。

この活動には、作品としてのボディアートと、他者に寄生するボディアートの二つのパターンがあります。

前者は私の望むままに描きますが、後者は完全に他者に依存します。

その時、私の中には作品制作とは真逆の感性が現れるのです。

私の意思に関係なく、絵が意気揚々と対象者の身体に沿って動き出すような感覚です。

私はただ、それをなぞっているだけだとも言えます。

絵は、対象者の本質や身体の詳細に反応するように形を変えていきます。私の持つ感性が他者に移ると、それは相手の身体に刻まれた経験や感覚に沿って、自然と流れ始めるのです。そして私自身にも予想のつかなかった形を見せてくれます。

最後に、最も問われる「タトゥーや刺青との違い」についてですが、私は一過性であること、そして責任の違いであると断定します。

人の一生を背負わずに、人に一瞬だけ寄生し、消える前に最大限に輝こうとする。そんな儚い美しさが、ボディアートの魅力です。

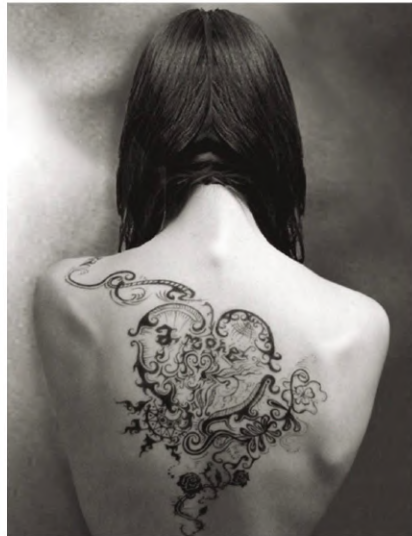
EPHEMERAL PAINTING ON THE BODY

本表現は、女性のメイク道具を画材として用い、身体の上に絵を描くボディアートです。使用する画材はすべて、肌への負担が少ないことを前提に選んでいます。

身体に直接描く行為であるからこそ、皮膚を傷つけず、日常的に落とすことができる素材であることを重視しています。

描かれる絵は恒久的に残るものではなく、消えることを前提とした一時的なものです。

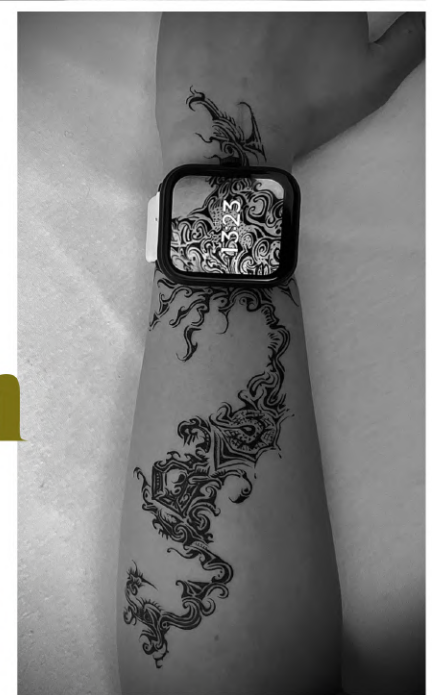
「A Woman Woven in Hues」
※モデル起用
※ 非定着性塗料を用いた一過性の作品



本ページでは、モノクロームで制作したボディアート作品をまとめています。写真としての見え方を意識し、形や流れが明確に伝わる構成を重視した表現です。



Monochrome Body Studies



A Focus on Visual Impact

指輪や時計などのアイテムを、構成要素として取り入れることがあります。





Public Demonstration

本ページでは、イベント出展時の記録を掲載しています。
来場者の前で、身体に直接絵を描くボディアートを行い、その場で制作を行う形式で実施しました。

対話をしながら身体に描き、絵が広がっていく変化も楽しめるボディアートは、その過程や対話も含めて、一つの表現として捉えています。

身体に描かれる絵は、私が一方的に形を与えるものではなく、対象者の身体の内方や、そこに蓄積された経験や感覚に応じて、自然と方向性を持ちはじめます。

例えば、弓道を長く続けてきた人の身体には、どこかその痕跡が残っているように感じられ、絵もまた、それに呼応するかのような形を見せることがあります。

私はそれを再現しようとするのではなく、現れてくる流れをなぞるように描いています



※10代・20代の参加者から、将来タトゥーを入れたいという声が多く聞かれました。
私はそれを否定するのではなく、日本社会に残る偏見という現実をありのままに伝えています。

ボディアートを身につけたまま街を歩くことで、人の視線を実際に感じる体験ができることも、この活動の重要な役割だと思っています。

Toward Finer Complexity

描写はより細密で複雑な構成へと移行し続けています。
細い線を重ねることで、身体の流れをより強く捉えるようになりました。
見る距離によって印象が変化することも、この表現の一部です。



新しい可能性への挑戦



閃きを形にすると いうこと

私は、常に新しい可能性へ挑戦することを大切にしています。ジャンルや手法にとらわれることなく、心に浮かんだ衝動のままに、あらゆる表現へ挑戦してきました。

それは、自分の描く絵が、何者にもなれる存在だと感じているからです。その可能性を自分自身で確かめ、証明したいという思いが、制作の原動力になっています。

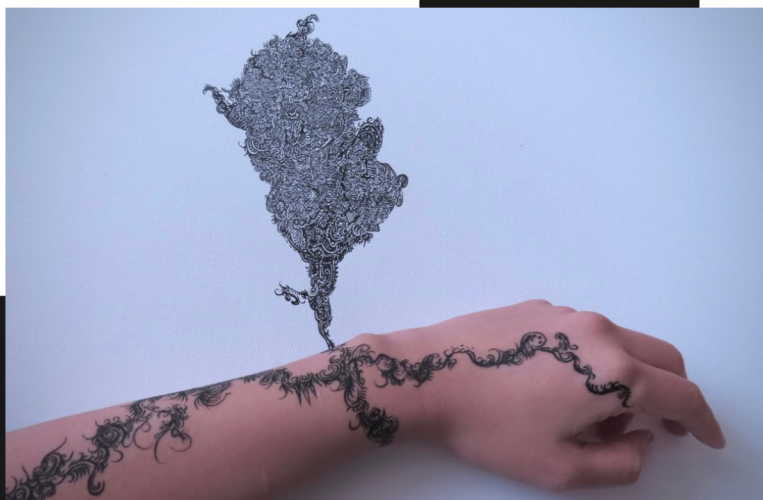
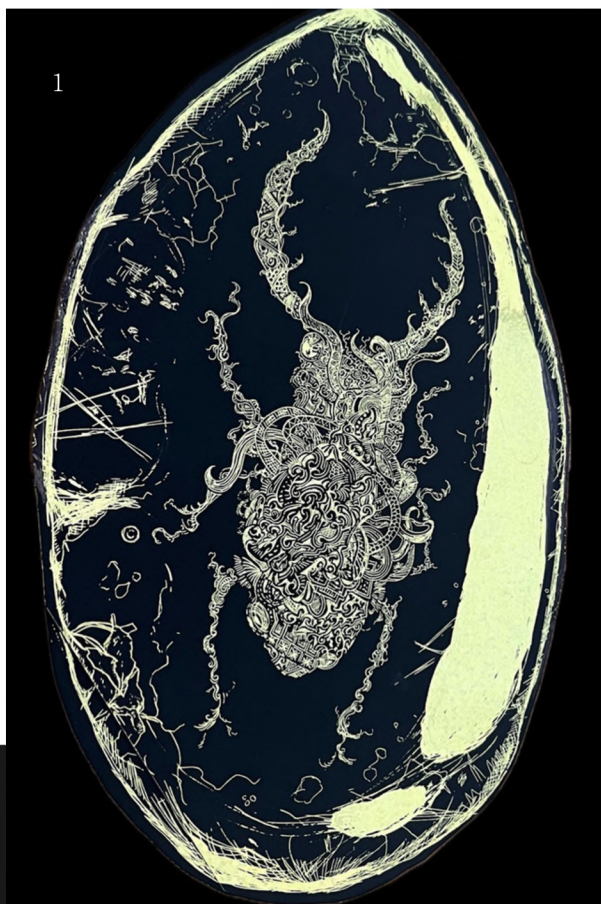
身体と絵との融合、アクリルや陶器、スクラッチ技法、樹脂や材木、和洋の要素など、形式や素材を問わず、閃いた表現に自然と手が伸びてしまいます。それは殆どが実験的なものであり、使ったことのない道具や画材を使用し、時には配合したり、新たに作り出したりしながら、失敗と成功を繰り返しています。

私が新しい挑戦をし続けているのは結局のところ、自分の絵に心底惚れ込んでいるからだと思っています。だからこそ、その絵がさまざまな姿に変化し、思いもよらない「何か」になっていく過程を見たいと強く願ってしまっています。それが成功する度に、何て素晴らしいんだろうと思う気持ちを、何度でも味わいたい。そんな気持ちが原動力になっています。

新しい挑戦のひとつひとつは、私自身の表現の幅を広げるための大切な試みだということは間違いありません。

Experimental Works

特定のジャンルにとらわれない実験的な表現をまとめています。
アクリル板を重ねて絵を立体化させる試みや、スクラッチアートによる細密な制作など、
素材や手法を横断しながら、閃きを起点とした表現を継続しています。



1) 「不自由なクワガタ」 /It feels suffocating.

平面作品を起点としながら、造形的な要素や立体的な構造を取り入れる試みも行っています。
描かれた面に高さや重なりを加えることで、平面と立体の境界を拡張する表現に取り組んでいます。

また、ボディアートと平面作品を組み合わせる制作も行っています。
身体に描いた表現を平面作品へと連続させることで、身体と支持体のあいだに境界を設けず、両者を一つの表現として統合しています。